

4月10日 マルコによる福音書14章32～42節 今日の説教から
説教題：「十字架への道」

私たち人間の罪が大きければ大きいほど、それを贖おうとしたイエス様の姿は私たちにとって大きな存在となります。イエス様の言葉に従っていながら、それでも度々過ちによって罪へと傾いてしまう私たちにとって、時にイエス様の姿は直視できないほどに眩く光り輝くものとなります。「私たちが模範とするべきイエス様は、私たちとはあまりにも違いすぎる」と、途方に暮れてしまうことがあります。

ただ、今日の個所に記されているイエス様の姿は、実はそこまで私たちと決定的に違うようには記されていません。十字架という死を目の前にして、これから自分が受けることになる受難に思いを巡らせて「ひどく恐れてもだえ」、「わたしは死ぬばかりに悲しい」「この杯をわたしから取りのけてください」と人間としての心の底からの願いを祈りにしています。私たちの主であるイエス様は、痛みをものともしない超人でもなければ、心を凍らせて死を恐れない機械のような人物でもありません。私たちと同じように、恐れと苦しみを抱きながら生きた「人間」でした。

そして、イエス様は36節の「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。」という言葉によって神様への全幅の信頼を示します。「アッバ」という言葉は、イエス様が話していたアラム語で「お父ちゃん」とでも訳すべき言葉で、かしこまった言い方というよりも、より親しみが込められた「お父さん」という呼びかけの言葉です。幼子が自分の父親に呼び掛けるように、そこには「全て神様に頼って大丈夫だ」という全幅の信頼が現れています。弟子たちとイエス様の間には、その信頼があるかどうかの差が大きく横たわっていたのです。すべてを委ねることが出来なかったからこそ、弟子たちはイエス様を置いて逃げ出してしまいます。

私たちも、日々の主の祈りの中で「天にまします我らの父よ」と神様に対して呼びかけています。私たちの神様は私たちのことを、イエス様の兄弟姉妹である実の子どもとして愛してくださっていて、私たちもその愛に応えるように、日々祈りを捧げています。このことについてパウロは、ローマの信徒への手紙の中で「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです」(8章15節)と、私たちが神様に向けて、実の父親としての呼びかけを行うことが許されていると教えています。私たちに注がれている聖霊によって、私たちは神様と確かなつながりを結ぶことが出来ているのです。

今日は棕櫚の主日の礼拝です。棕櫚の葉で迎えられたイエス様がエルサレムに入城するその姿は、軍馬にまたがった遠い存在ではなく、小さなろばに乗って私たちと同じ目線で歩んだ、「人なる神」イエス・キリストの姿でした。私たちを遠くから、高みから導く方ではなく、私たちと共に歩き、私たちの痛みも苦しきも知っておられる方なのです。そのイエス様は、神様に対してすべてを頼り切って大丈夫だという信頼をもって歩むことが出来ました。だからこそ、十字架への受難の道を、ゲツセマネの祈りで吐き出したような苦しきを抱えながら、それでも迷うことなく歩み続けることが出来たのです。

十字架への道は、イエス様と私たちを隔てるものではありません。イエス様は私たちの少し先を歩き、私たちの手を取り、自分たちの小さきに苦しむ私たちを支えてくれています。その暖かな導きに支えられながら、イースターまでの受難週を共に歩んで行きましょう。

今日の説教箇所：マルコによる福音書 14 章 32～42 節

- 32:一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」
- 37:それから、戻って御覧になると、弟子たちは眠っていたので、ペトロに言われた。「シモン、眠っているのか。わずか一時も目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、向こうへ行って、同じ言葉で祈られた。再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

マタイ福音書 26 章 39 節、42 節

- 39:少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」
- 42:更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」

ルカ福音書 22 章 42～44 節

- 42:「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは痛みもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕